

小泉八雲のことも（続き）

根 本 重 熙

八雲（ハーン）は、日本へ来て以来、松江、熊本、神戸、東京と移り住んだのであるが、最初の居住地である松江時代のハーンについて紹介を続けたいと思う。

明治37年10月4日（火）

●詩的の経歴。氏は日本に渡りてより、山容水態の秀麗に酔はされ、人情風俗の純美を喜び真に詩人安息の仙境なりと、既にこの国を終焉の地となすべく心に思ひしが、まづ生活の職を求めてその風土に馴れし上、静かに想を鍊らんと、松江中学校の英語教師となりぬ。雲州は我国の最も古き歴史を有する国なり。従つて、猶ほ古習古俗を存し、風景亦絶佳の地なり。氏は自ら其の地を相せしにも非ずして、偶然にもこの国に來りしは、奇ならずや。氏は果して同国を愛する事深く、其古き歴史を聞きては益々趣味を感じ教鞭を執るの傍、国史を研究するを怠たらず。殊に、出雲大社の由緒の如きは、第一に詩的の調査を遂げ、日本の最旧家たる千家氏の家を訪ひ、家風習慣を尋ねる等、詩囊は忽ち多くの材料に満たされ一著作を成し、之れを倫敦の某書肆より出版したり。年を経るに従ふて、日本殊に出雲を愛好するの余り、祖国の事は全く念頭を去り、ついに、出雲大社の社家たる小泉氏の女を娶り、日本に帰化して同姓を名乗るに至れり。古に出雲八重垣妻籠の地、今は、この欧州詩人の好配遇を得せしめたり。氏の経歴自然に詩的なるも妙ならずや。と山陰新聞が述べている。（仮名遣は原文のまま）

前号で述べた通り、ハーンは1890年（明治23年）4月4日に横浜に上陸したが同月6日に、東京文科大学教授チェンバレンに就職依頼の手紙を出している。又一方で、エリザベス・ビスランド嬢なる人物からの紹介状をもらってあった横浜のグランド・ホテル社長ミッチェル・アクドナルド、および文部省普通学務局長服部一三らの斡旋によって、7月19日東京で、島根県知事・籠手田安定との間に、島根県立尋常中学校教師となる契約を結んだのである。

奇遇の人

上記の服部一三は、ハーンにとって、なつかしい人である。1884年（明治17年）に、ニュー・オーリンズで、百年祭記念博覧会が開催され、日本も美術品工芸品を出品した。この会場に服部一三という事務官がいたことをハーンは記憶している。ハーンは日本の出品物に強い興味を持ち続け、その事務官に何回も面会を求めて、日本の宗教歴史風俗習慣等について熱心に質問した。同事務官談によると『連日会場を訪れる背の低い近眼の参観者があって、会場を何回も行ったり来たりして一つ一つの出品物に眼をすりつけるようにして異常に熱心な観察をしている。余りに熱心であるから呼びとめて、こちらから話しかけて見ると、それがハーンさんでした』とのこと

である。ハーンが来日早々将来の進路についての大難局に直面していた時この人が文部省の高官としてハーンのために、親身もおよぼない努力をしてくれることになるうとは、彼はもちろん夢想もしていなかった。全く地獄で仏のたとえ通りの喜びであったであろう。

ハーパー社とハーンの関係

ハーンは服部事務官との会見記事を、ハーパース・マンズリー (Haper's Monthly) に書いたのが、同社と関係を持つ発端となった。同社にウィリアム・パットンという名の、日本美術に深い知識を持つ美術主任が居たことは前号で述べたことであるが、ハーンはその主任と、同好者として気が合い種々話しをしている時、ぜひ日本に行きたい。そうすれば以前ハーンが同社のために書いた『西インド紀行』以上におもしろい記事が書けるだろうと思う旨を話した。主任も同感しその記事に挿絵を入れた方がよいと考えて画家ウェルドンをハーンに同行させることにした。主任はそこでモントリールに赴きカナダ太平洋鉄道汽船会社に社長を訪れ上記の計画を説明した。社長は、ハーンが日本へ行って興味ある記事を書いて送って来れば訪日希望者が増加することになり社業の進展につながると考えたので、ハーンとウェルドンに、日本への往復の汽車汽船の優待券と各自に250ドルの手当金を贈ることを約束した。パットンの社長訪問は成功と見えた。ハーンは前途に不安を予感したが、日本へ向って出発した。彼は来日後、自分の過去を振り返って考えて見た。西印度へ行った時も、ハーパー社は、ハーンから原稿を買ってくれただけ（それも一度は拒絶された）で旅費滞在費等は自弁であった。今回の日本行き旅行の条件も自分にとって大変不利である。ハーパー社が要求する記事の題目も自分の気に入らない。旅費や手当はカナダ太平洋鉄道汽船会社の贈与であって、ハーパー社とは無関係である。画家の条件が自分のそれに比べて、はるかによい。特派員の待遇というものは、こんなではないであろうと思った。彼は『日本への冬の旅』と題した記事を同社へ送った。これはモントリールからバンクーバーに行き『アビシニヤ』という小汽船に乗って13海里の速力で17日間かかって横浜に到着するまでの紀行文である。これは、ハーパース・マンズリーに出た。同社はこれに対して150ドル送って来た。彼は横浜から江の島、鎌倉等異国の珍しい景色を眺めながらも疑惑は広がる。そして、これは自分に対する重大な侮辱である。世間なれしていない自分を利用して、ハーパー社がその利益を企図したものであるとしか考えられない。そうであれば、自分も勝手に行動してよいのだと考えた。縁切りの手紙を同社へ送りつけたのは5月も末の頃であった。先に自分の著書について取りかわした契約書も送り返してしまった。折り返し同社とウェルドンから弁明の手紙を送って来たが、ハーンは、もはや問題にしなかった。後に同社から書物の印税や原稿料を送って来た時も、その受け取りを拒んだ。そこで同社は、横浜の米国領事に依頼して、彼の親友マクドナルドのとりなしで送金を受け取らせようとした。マクドナルドはその金額で、グランド・ホテルの株を、ハーン名義で買って置き、一方では、ハーンに対して『憎むべき相手方からは、君のように当然受け取るべき金までも受け取らないというのではなくて、反対に成るべく多く取るように工夫しなければならない』と、諄々と説得を重ねた末受け取るようにさせたとのことである。

一国ということについて

ハーンは、やさしい親切的な性質で、すぐれた科学者の理解力を持っている反面、妻セツが、その『思い出の記』の中で嘆かなければならなかったように『大へんな一国な気性で困った事がございました。私が間に入って、なんとか言訳致しますが、その時は随分困りました』という次第になるのであろう。しかし彼女は、この記述の中で更に『私が申しますのは、少し変でございますが、ハーンは極正直者でした。微塵も悪い心のない人でした。女よりも優しい親切なところがありました。ただ幼少の時から、世の悪者共に苛められて泣いて参りましたから一國者で、感情の鋭敏な事は驚く程でした。嫌いとなると少しも我慢しません。私も未だ年も若い頃ではあり、世馴れませんでしたから、この一国には、毎度弱りましたが、これはハーン、極まじりけのないよいところであったと思います』と述べて彼女はハーンの大きな欠点を暖い母性本能の中に、そっと包み込んで、更に進んで深い理解をさえ示している。ハーンが出版社等に対し腹立ちまぎれに乱暴な手紙を書き、すぐ投函するように、彼女に興奮して言い付ける。しばらく後になってハーンは『さきほどの手紙を投函しましたか』とたずねる。「もちろん、確かに投函しましたよ」。と。彼が大変後悔するのを見届けてから、その手紙を取り出してハーンに見せる。ハーンが大変よるこんで、『やはり、あなたでなければなりません』と感謝して、その手紙を、おだやかな内容に書き改めて投函したことが一再ならずあったと彼女は述懐している。セツが指摘しているように、前述した彼の無限の優しさ、親切心、鋭い理解力等の特性と、そのどうにもならない一國さとは、本来矛盾するものではないであろう。彼の平常の利他的とも言い得る心情に対して、この一國さは彼の心の深層で作動する自我主張の平衡運動かも知れない。人間の性なるものの不思議な側面とでも言うべきであろうか。とにかく来日早々ハーバー社との間を彼がその一國さから（と筆者は見るのであるが）を絶ったことは、セツが述べているように『遠い外国で頼り少い独りぼっちとなり』という状態であって、ビスランド嬢に宛てた手紙の中で『今は飢えきっているところです』と、彼らしくもない弱音を吐いていることを見ても彼が今や重大な局面に立たされるに至ったことは間違いのないであろう。

日本で求職運動を続けるべきか、または、アメリカへ帰るべきであろうか思案にくれたことは次の手紙によっても明らかである。

親愛なる ビスランド嬢

合衆国のどこかで、きちんと定まった給料で私を雇ってくれる者は無いでしょうか。ご周旋をお願いします。私はハーバー社とは永久的に縁を断ってしまいました。今は飢えきっているところです。最近3ヶ年間、私の平均収入高は1ヶ年500ドルでありました。日本では、ニューヨークより物価が高くあります。尤も日本政府に雇ってもらうことができれば別ですが。私は一つの口の契約をしてありますが、それは9月まで延引されます。

何とかなることではしょうが、それにしても、このように無視され、このように攻め立てられ、

このように飢え、特に、このように精神的の屈辱を受けるべく強いられて、飢えや寒さよりも、もっと悪い目にあうのは、私にとって、もはや耐えきれぬことであります。だから私は、あなたに対して、恥ずかしいという感じは、みな捨ててしまっ、ひたすらにお願い致しますから、もし近いうちに、定職を与えてくれる所がありましたならば、新聞社なり、あるいは、出版工場なりへ、よろしくご紹介を願います。 (1890年)

このような、いきさつがあった後、英語教師として松江の地へ赴任することとなったのは、前述の服部普通学務局長とハーンの奇縁をも含めて、彼自身にとっても、また、日本にとっても、山陰新聞と共に、『奇ならずや』と言わねばならないであろう。

ハーンが敬愛した人たち。

1. 島根県知事籠手田安定 山岡鉄舟門下の駿足といわれた人で、古武士の面影をもった、熱心な国粹保存家で、松江の老士族たちが、この知事によって武術が復興したのを喜んだ。二の丸では、昔風の競馬や、剣術や槍の試合が行なわれ、ハーンはその都度特別に招待されたと妻セツは語っている。同知事が24年5月に新潟県へ転任した時は、ハーンは大へん離別を惜しんだということである。彼の来日後の、最初の著である *Glimpses of Unfamiliar Japan* (日本瞥見記) の中で言う。

県庁(島根)に入り、広い階段を上り、欧風に敷物を敷きつめた一室に入る。その室には出窓もあれば、クッションのついた椅子もある。一人の人が、小さい円卓に対して、いすにかけている。その周囲に5、6人の人が立っている。いづれも日本の礼服を着ている。立派な絹はかまの袴、絹の着物、絹の紋付羽織。自分の平凡な洋服を恥じ入らせる立派な威厳のある服装である。これらは県庁の役人と教師である。いすにかけたのは知事である。知事は私に、あいさつせんがために立って、巨人の握手を与える。この人の目を見て、私は一生、この人が好きになるような気がする。温和な力と、大様(マツ)な親切の多くあらわれた。——仏の静けさが悉くあらわれた——小児のように鮮やかな正直な顔である。この人のそばにあっては、他の人々も甚だ小さく見える。実際この人を始めて見た時は、別人種の如き感じがする。私は古えの日本の英雄は、この人と同じ型ではあるまいかと考えている時、この人は私に、いすを取るように合図して軟い低い声で、私の通訳の労をとれる人に話しかける。その顔を見た時に、私が予想した通りの流暢な深い声に一種の魅力がある。……と。

2. 島根県松江尋常中学校教頭・西田千太郎 文久2年(1862年)松江市雑貨町の士族の家に生まれた。明治25年から、30年3月15日に36才を以て死去するまで、約5年間、同校教頭の地位にあり、ハーンが、明治23年8月末、同校の外人教師として赴任してから、翌年11月中旬に熊本第五高等中学校に転出するまでの約1年2ヶ月余り、ハーンのため公私両面に亘って世話をした。セツは例の『思い出の記』の中で回想している。……中学の教頭の西田と申す方に大そうお世話になりました。二人はたがいに、好き合って非常に親密になりました。ヘルン(夫人は常に、ヘルンと呼んでいる。)は西田さんを全く信用してほめていました。『利口りこうと、親切と、よく事を知る。少

しも卑怯者の心ありません。私の悪いこと、みな言うてくれます。本当の男の心。おせじありません。何と可愛らしいの男です』と。お気の毒なことにこの方は、ご病身(筆者注：肺患であるという)で始終苦しんでいらっしやいました。『ただあの病氣、如何に神様悪いですね。私、立腹』などと言っていました。また『あのような良い人です。あのような病氣参ります。ですから世界、むごいです。なぜ悪き人に悪き病氣参りません』。東京に参りましても、(筆者注：明治28年、1895年12月チェンバレン教授を通じて、東京帝国大学長外山正一から、文学部で英文学の講師に招きたい旨の交渉を受けていた。翌年再度外山学長の要請ありそれに応じ以後6年に亘り教鞭を執った。)この方の病氣を大そう気にしていました。西田さんは、明治30年3月15日に亡くなられました。亡くなった後までも、「今日途中で、西田さんの後姿見た。私の車急がせました。あの人、西田さんそっくりでした』などと話したことがあります。似ていたので、なつかしかったと言っていました。早稲田大学に参りました時(筆者注：明治37年(1904年)早稲田大学文学部から講師に招かれた) 高田学長がどこか西田さんに似ていると言って、大そう喜んでいました」と。彼の著作『東の国から』を西田に捧呈している。

3. 杵築大社きずきのおおやしう(出雲大社) 宮司たかのり千家尊紀(81代国造) 出雲大社由緒略記によると出雲大社の祭神は大国主大神であつてまた天照大神あまてらすおおみかみの第二の御子天穗日命あめのひのみこととその神裔であるものが子孫相承けてその祭祀の職を嗣いで来たがやがて崇神天皇の時代に第12代鷗うがつくぬ濡淳うじのおやのみこと(またの名氏祖命)は初めて出雲國いつものくにのみやつこ造の職に任ぜられたので、この時から宮司の職の他に、出雲国の行政を兼ね行うことになったという。ハーンは『日本瞥見記』の第八章『杵築——日本最古の社殿』の中で次の様に述べている。

出雲が特に神々の国であり、又今日猶その子孫によって崇敬される伊壯いざなぎのみこと諸尊、伊壯再尊いざなみのみことの民族の揺籃地であつたと同様に出雲の中でも、杵築は特に神々の都会であつて、且つその古い社殿は古代の信仰、神道という偉大な宗教の老家本元である。さて、杵築を訪ねることは、私が杵築に関する伝説を知ってから以来、私の最も熱心なる願望であつた。欧州人で杵築を訪ねたものは甚だ乏しいことと、またその大社殿へ昇殿を許されたものは一人もないことを発見して、その願望は一層強くなった。実際、大社の境内へ近寄ることさえ許されなかつたものもある。が、私は私の親友で、また杵築の宮司を親しく知っている西田千太郎氏からの紹介状を持っているから、もっと幸運だろうと信じる。たとえ私が昇殿——日本人の中でも少数にのみ与えられる特権——を許されないにしても、少くとも宮司、即ち太陽の女神から系統を引いた家柄の千家尊紀氏に面会の光栄を持つことになるだろう。

私は9月の或る好い天気の後午早く松江を立て、小蒸気船に乗って杵築に向つた。(以下略) 一日の旅行でやや疲れたので早く床に就いて、夜明け頃に目が醒めるまで、植物の如く夢も見ずに眠つた。まだ早朝であるのに(宿の)娘が、宮司から既に使者が来ていると告げた。使者は私が進めた一椀の茶を受け、ご主人が社殿で私どもを待っていると告げた。(以下適宜抜粋)

これは愉快な通知であるが、私どもは早速行くことができなかつた。晃あきら(横浜から道案内通訳

としてハーンに同行した青年)の服装に欠点があると使者が注意した。神前へ出るのには、新しい白足袋と袴を着けねばならないのだ。幸い晁は宿の主人から袴を一着借りることを得た。できうる限り、清潔端正に身を整えてから、私どもは使者に案内されて社殿へ向った。……………

多くの参拝者の側を過ぎて、拝殿の向側へ出ると、至聖所へ通ずる鉄さくを施した広い石段の下へ来た。下段に正式の儀礼服を着けた神官が数名私どもを迎えていた。私が石段に達すると、彼らは私に対して一斉に最もいねいな礼をした。靴を脱いで登ろうとすると、長身の神官が、神殿へ登る前に潔斎を行うべきだということを簡単な意味深い身振りで示した。私が手を差し出すと、神官が長い柄のついた竹製の杓子のような器から清水を注いで、手を拭くために小さな青色の手拭をくれた。それから私どもは登って行ったが、私は洋服の体裁の拙さに恐縮して、無作法な野蛮人のように自分が思われた。

階段を登ると広い廊下があって……………長い低い台が一端を廊下の方へ他端を凹間の方へ向けて、この宮の前に据えられ……この台の廊下に近い方の端にひげの生えた荘厳な人物が異様に髪を結び、全身真白な装束をして、最高の神官らしい姿勢で畳を敷いた床の上に坐っていた。案内者の神官は、私にその人の前に坐って礼をするよう指図した。これが杵築の宮司、千家尊紀で、この人に対しては、私宅においてさえ誰も膝を折ってでなくば、言葉を発しないし、太陽の女神の後裔であって、今なお人間以上に考えられて衆庶の尊敬を受けつつある人である。私が日本の敬礼の習慣に従って平伏すると、初対面の者をも直ぐに寛ろがせるような慇懃至らざるなき挨拶を受けた。私の案内を務めた神官は、今や宮司の左側の床の上に坐った。同時に、この聖殿の入口までついて来た他の神官たちは、外の廊下で、それぞれ座に着いた。

千家尊紀は若い、元気のよい人だ。そこに私の眼前に、その古代エジプトおよびギリシヤの僧侶風の不動の姿勢、その奇異な高い冠、その豊富な捲毛の髻と、その彫像のような波形を打たせて身辺に拡がっている、ゆったりした、雪白の神官装束で、彼が坐している時、彼は私にとっては、旧日本の絵画によって古代の王公貴人や、英雄の荘厳なる風姿について、私が想像していた一切の面目を代表したものであった。彼の人物の威厳だけでも、尊敬を禁ぜざらしめる。しかしその尊敬の感情と伴って、私の心中にはまだ、日本で最も古い国の民衆によって彼に払われる深い恭敬、彼の掌中にある無限の靈的権能、彼の血統の宏遠なる尊貴という考えが、突如閃めいた。私の尊敬は進んで畏懼に近い感情となった。……………初めの数瞬間の厳肅は、彼の親切げな黒目を依然じっと私の顔に注ぎながらも、彼の豊かな低音で発せられる最初の言葉で愉快に破られた。それから私の通訳が、彼の挨拶を訳した。その長い慇懃な文句に対するに、私はできる限り立派な応答を以ってし、私に与えられた特別の好意に向って感謝を表した。

宮司は晁を通じて答えた。『欧州人で大社へ昇殿を許されたのは、貴下が最初です。杵築を訪ねた他の欧州人で、境内へ入ることを許されたものは少々ありますが、貴下だけが神殿へ入ることを許されたのです。以前にはただ好奇心から、ここを訪ねようとした者は境内へさえも近寄ることを許されなかったのです。しかし西田氏の書面にご来遊の趣旨が認め^{した}ててありましたのでかよう

に欣然ご案内申し上げる次第です』

私どもが社殿の一切の珍什を見てから、宮司は社に近い彼の私邸へ私どもを招いて、他の宝物を見せた。

自宅でただ普通の日本式正服を着ている宮司は、一個の紳士としても、始め宮司として、その大きな白袍を着たのに劣ることなく荘厳に見えた。が、いかなる主人公もこれほど親切で、丁寧且つ寛大なるは稀だろう。云々と。その心のときめきを雄弁に述べている。

4. 島根県松江尋常中学校教諭片山尚綱 漢文の教師で、漢学者片山兼山の孫である。英語の通じない片山を訪ね、手真似で好意を表したり、散歩途中で、片山を見つけ『カテヤマ、カテヤマ』と呼び追いついて、一しょにどことなく歩いたことがあった。片山が茶菓を出した時赤色の羊羹を箸で取った。ハーンは近眼のためそれを煙草の火と見違えて煙管を出して受けようとして二人で大笑いしたことがあったということである。ハーンの友情は積極的で本物のように思われる。

明治24年5月26日 松江日報(373号)によると

● ヘルン氏大に満足せり。氏の始めて本県に雇聘せらるる事となるや、文部大臣は特に本県に注意を下して、氏の如き良教師は、中々かくの如き小給にて雇い入ることを得るものにあざれども幸に氏は独身にして多くの出費を要せず。為に多くの給料を望まざるを以て貴県に於ても、心を此辺に注ぎ充分優待せらるべしとありしかば、同氏の来県以来、本県の氏に接するや、中々懇篤なるを以て、氏も大に之に満足し、松江の寒気には閉口すれども、向う五六年は如何なる事情あるも、当地を去るを欲せずと語りしとか。とある。彼の着任は、幸先大吉のようだ。

出雲への経路について

先に名前が出た真鍋晃^{まなべあきら}という書生と共に横浜を出発し東京から姫路まで汽車、姫路から人力車で津山を経由し山陰街道へ出たものと思われる。8月28日(旧暦7月13日)西伯郡下市に到着し、この日は盆踊りを見物し翌日か翌々日、米子から蒸汽船に乗って8月30日午後松江に到着し富田旅館に投宿した。明治23年9月1日(月) 山陰新聞は『ヘルン氏は一昨日午後4時来松』と。

富田旅館に宿泊当時のハーンについて

明治15年6月15日に雙蛙：桑原羊次郎翁が同旅館の女主人富田ツネ(83才)について当時のハーンに関する思い出を聴取している。当時彼女は32才であったという。以下その時の彼女の話の一部。

先生は明治23年8月30日到着早速お風呂をたてました。入浴後白浴衣を出したが大へん気に入り二階の8畳の間で、キッチンと膝を曲げておすわりでした。先生の到着前、県庁からいすやテーブルを多く借りて、お役人の出張を待ちました。先生は西洋人としては身長低く5尺2・3寸位、頭髮は灰黒色、鼻下にひげをはやし鼻高く、背を屈がめて、ざぶとんに坐り浴衣姿で葉巻を口にして居られる様子が、西洋人のような日本人のような、何とも知れないおかしさを感じました。私どもには言葉がまるでわかりません。お声の調子は余り高い方ではなく、いささかさび声で、

時々高声で笑われました。県庁の役人がこれを取囲むようにしていすにかけられている様子は、丁度罪人でも調べるようなかっこうで珍景でした。私どもは全く英語がわからず先生の日本語はわからずまことに困りました、中学校の西田千太郎先生や中山弥一郎先生がご来訪の節は、まことに何かと便利でいろいろ先生のお望みのことを伺って置きましたけれども、突発のことがある時は、先生は英和辞典をいつも離さず持っておられましたので、一字引きを引いての話で用を達しましたので、実に不便極まるもので、毎々間違いがありましたので大笑い致しました。ご来松の時横浜より真鍋晃という書生さんをつれておいででした。……先生は極めて壮健なお方でした。

私方におられた間に病気になられたことは一度もなく、衛生には平常余程心を留めておられました。一例を申すと外出からお帰宿の時も宿でお書きもののすんだ後でも、必ず手を洗い、うがいをなさいました。朝は牛乳と生卵（一度に8・9個も食べられました）ですまされ昼と晩はおさしみ、煮付け、酢の物、焼魚等なんでもお上りで、酒は昼と晩に日本酒一本（一合八勺入）を飲んで居られ洋酒を注文したことは覚えていません。

先生とセツさんの結婚は京店の借家（筆者注：富田旅館を出て11月初に移り住んだ家）時代に違いありません。実は京店の借家に先生一人置くといふ訳にも行かずにお信と散髪屋の娘のお万と二人を女中としてつけ三度の食事は私方から運びました。ところが先生にどこか士族のお嬢様を奥様にお世話したいというお話しが、西田先生よりありまして、色々物色した末に、お信の友達に小泉セツさんという士族のお嬢さんがあり、このお方がよかろうということになり、私も同意致しまして、私方より先生に紹介しました。ご同棲の翌日、私は始めて京店のお宅に伺いますと、セツ様の手足が華奢でなく、これは士族のお嬢様ではないと先生は大へん不機嫌で私に向かって、セツは百姓の娘だ。手足が太い。おツネさんは自分を欺す。士族ではないと。たびたびの小言でありましたので、これには私も閉口致しまして種々弁明しましても、先生はなかなか聴き入れませんでした。しかし士族の名家のお嬢様に間違いありませんので間もなく万事めでたく納まりました。西田先生が表面の媒酌人となっているかも知れませんが、實際を申せばお信の世話でした。その後お信がお世話したに違いありません。ご結婚は明治24年2月末あたりに違いありません。それから女中さんが一人見えましたのでお信は私方に帰り、お万さんは断りました。

小泉セツという名の女性

正式の媒酌人を西田千太郎にして日本式の結婚式を以ってハーンと結ばれた小泉セツは、彼女の手足が華奢でなかったために、蜜月の最初から、背の君にひどくお冠を曲げられてしまって結婚生活は誠に心細い出発をしたのであるが前出富田旅館の女主人も保証している通り“士族の名家のお嬢さん”であることは間違いない。前号で述べた通り松江藩士小泉湊の娘で御番頭を勤め五百石を取っていた。母方の祖父は放蕩な主君を三度いさめて赤坂見付上の主邸で切腹した忠臣塩見増右衛門という知行千四百石の家老であり、嘉永以後『三本杉家老鑑』の外題で芝居に、『線香山』の題名で講談として江戸で広く知られて居り、又河竹黙阿弥作の歌舞伎「天衣紛上野初花」

も同じ事実を基にしたもので、家老高木小左衛門のモデルは増右衛門であるということである。維新後セツの父も織物工場を興したが『土族の商法』で失敗してしまった。一家は悲惨の極に立ち至った。セツの手足が発達していたのは、少女時代から同工場で彼女がした労働のためであろうと桑原翁は推定している。事実、ハーンの長男一雄は例の『父八雲を憶う』の中で、セツが一女工として働いたと述べている。ハーンが、1891年（明治24年）8月7日、日御崎神社に参拝した際宮司小野尊光男爵夫人がセツの従姉であるために格別の取り扱いを受けたということである。

ハーンの著作に関しての彼女のコミットメントについては、前号に彼女の記述をもって紹介したことである。彼の作品の『破られた約束』（Of a Promise Broken）というのは出雲の話をもとにしたものであるが、死期のせまった妻に『侍の信義にかけて、再婚しない』と誓った夫が、その妻の死後間もなく再婚したため、先妻の亡霊のため後妻が惨殺されるという筋のものでその終りの方で『これは、ひどい話だ』と。わたしは、この話をしてくれた友人にむかって言った。『この死人の復讐は、——もしやるなら——男にむかってやるべきだ』。『男は、みなそう考えます』彼は答えた。『しかし、それは女の感じ方ではありません』。彼の言う通りであった。という一節がある。この友人とあるのは、セツである。こうして、この話が広く世に出る。きっかけは、セツによって作られたのである。彼女は、この意味では貢献を認められてもよいのであろう。ハーンも彼の作品群は、夫人の才に負うところが少くないことを認めていたので、ある書物の出版を、夫人の名でしようとしたが、夫人の反対で思い止まったということである。彼女は述べている。かねてヘルンは『まじりけのない日本の真中で生きる好き』というのでしたから、自分でその家と近所の模様を見に参りました。町はずれで、後に竹藪のあるのが、大変気に入りました。建増しをするについては、冬の寒さには困らないように、ストーブをたく室が欲しい。又書斎は、西向きに机を置きたい。外に望みはない。ただ万事、日本風にというのでした。この外には何も申しませんでした。何か相談を致しましても、『ただこれだけです。あなたの好きしましょう。よろしい。私ただ書くこと少し知ります。外の事知らないです。ママさん、なんぼ上手にします』などと言って相手になりません。強いて致しますと、『わたくし、時持たないです』と申しまして、万事私にまかせきりでございました。と。

また彼女は、ハーンの仕事に没頭している際の思索を乱さないように、なみなみならぬ気を使っている。彼女は言う。私は部屋から庭から、きれいに、毎日二度位も掃除せねば気のすまぬ性ですが、ヘルンは、あのバタバタとはたく音が嫌い『その掃除はあなたの病気です』といつも申しました。学校へ参ります日には、そのるす中にきれいに片付けて、掃除しておくのですが在宅の日には朝起きまして、顔を洗い食事を致します間に、ちゃんとしておきます。この他掃除をさせて下さいと頼みます時には、ただ五分とか六分とかいう約束で承知してくれるのです。その間、庭などを散歩したり、廊下をあちこち歩いたりしていました。と。

前号で述べた通り『世界で一番良きママさんです』と彼が長男に語った時、全く彼は実感をもつ

て、セツの内助の功に対する深い感謝と幸福感を示していたのであろうか。

お信について

ハーンが『わたしは長生きしないから急ぎます』を口癖に世に問うた作品群の著作に関して、セツは或る場合には共著者と言ってもよく少くとも極めて有能な助手であったという評価は、ハーン自身が承認していることであるが、この「助手」をハーンに世話したのが、お信であるとは、前述のとおり富田ツネが、明言するところである。ハーン夫妻に対して、出雲の神様の役目を見事に果たしたお信についてツネは次の様に回想している。

お信は出雲国能義郡広瀬町の池田というものの子でありました。両親に早くより死別し、その祖母にあたる人が、お信の7才の時にその弟と二人を連れて、少しのゆかりを頼って私方に参りお信は女中代りとして手伝を致しまして、八雲先生が見えた時は、お信は15、6才の時でした。先生のお世話は万事私とお信とが致しました。先生は大層お信を可愛がって、英語をお教えなさいました。そしてお信は、かわいそうにも23才でなくなりました。と。

セツは言う。松江に参りまして、当分材木町の宿屋に泊りました。しかし、暫くで急いで他に転居することになりました。事情は他にもあったでしょうが、主なる原因は、宿の小さい娘（筆者注：これがお信である）が眼病を煩っていましたのを気の毒に思いうて、早く病院に入れて治療するようにと親に頼みましたが、宿の主人は唯はいはいとばかり言って延引していましたので、『珍しい不人情者、親の心ありません』と言って、大層怒ってそこを出たのでした。それから末次本町と申すところの或る物持ちの離れ座敷に移りました。しかし『娘少しの罪ありません。唯気の毒です』と言って、自分で医者にかけて、全快させてやりました。自分があの通り眼が悪かったものですから、眼を大層大切に致しまして、長男の生れる時でも『よい眼をもってこの世に来て下さい』と言って大心配でした。と。

明治23年11月18日（火）

●ヘルン氏に関する雑話

（前文省略）氏の僑寓、縁取町富田屋の娘、常に眼疾を患う。氏之れを慰藉し、私費にて東京に行き名医に就て治療を受けしめんとせしも、当市医師西川自省氏の眼科に堪能なるを聞き、直に診察を受けしめたるが、西川氏は此義俠心に感動し無謝義にて治療を加えんと謂ひしを、ヘルン氏之に感じ、マニラ烟草数函を贈りしとは近来の美事。（山陰新聞）

松江の朝

前述の様に明治23年8月30日夕方松江着。富田旅館に投宿したハーンは松江の朝の印象を述べる。松江の一日の物音の中で眠っている人に先づ聞こえて来る物音は、丁度耳底で緩やかな大きい脈がうつようにひびいてくる。それは太い柔らかな鈍い衝撃の音だ。その規則正しさと、その掩いかくされたような深い音と、その聞こえるというよりは、むしろ、感じられるように枕元から揺れてくる点からは心臓の鼓動に似ている。……日本人の生活に伴うあらゆる音響の中で、私には最も哀れに思われる。米つきの音は日本という国土の脈搏だ。

それから禅寺洞光事の大きな鐘が、「ごーん」とひびき渡って市の上空を揺がせる。続いて私の宿に近い材木町の地藏堂から太鼓の淋しげな音が朝の勤行を告げる。最後には早く出かけた行商人の物売りの声。

「大根^{だいこん}やいー 蕪青^{かき}や、蕪青^{かき}」「薪^いや、薪^い」…炭火を燃やすための、小さな細いたきつけの薪の小枝を売る女の悲しげな声。

幻のようにぼっとした、慈愛にみちたさまざまなれい明の色が、睡眠の如くふんわりした朝もやに浸っていたのが、抜け出でて、目に見える蒸気となって上って行く。ああ奇観絶景、はるかに見渡すと薄色の霞が湖水の端に長く渡っている、星雲状の長帯だ。(日本警見記)「神国の首都」

筆者注：松江第一日の翌朝ハーンが聞いた洞光寺の鐘は戦争中に献納され現在あるのは戦後の新しいものである。地藏堂は現存せず木の柱が立っている。

富田旅館を去ってハーンは、セツの言う『もの持ちの家』へ移転した。織原嘉右衛門邸の背後の借家である。明治23年(1890年)11月チェンバレン教授への手紙で彼は言う。

私はも早、旅館に居りません。今は非常に綺麗な家の持主であります。湖水に臨んだ家でありますから、窓から望遠鏡で望むとその美しい藍色の広い水面を越えて殆ど杵築までも一眸の中に入れることができます。目に触れる峰という峰は、みな神様に因縁の多いものばかり、何かそれに理由がついて居ます。その多くは昔の神様の名をそのままに取ってつけてあります。云々と。

富田旅館から織原借家へ移転後ハーンは西田千太郎あての手紙の中で『昨夜はご親切なお言葉有難う。今日は平常の通り授業することを得ました。明日は全快することと思われます。ただ胃腸がわるかっただけで、今はほとんどよくなりました。私は全く怒ったために病気になると思ひます。明日まで家の世話をしてくれる人が来ました。明日になれば織原氏が女中をよこすはずです。私はその女のために、夜具を求めました。その女は始終家に泊ってくれるそうです。やや年寄りではあるが、大へんよい女中だそうです。とにかく宿屋の女中でないから、折合いよく行けることでせう。……しばらくすれば、よくやって行けるようになることと思ひます。一切宿屋の関係から脱することが、私の精神の平和のため絶対に必要と知りました。約一箇月間、午前三時より前に眠ることはできなかつたのです。——そんなに悩まされたのです。』と述べている。

以上の手紙にあるように、深刻にハーンを悩ませることになったのは、どんな大問題であつたのか……『宿屋との関係を脱することが絶対に必要である』と言っている所を見ると、先に、富田屋の女主人が、二人の女中に食事を運ばせたと言っている女中が専任でないことによる種々のトラブルのことであろうか。織原氏がよこす女中というのは多分セツのことであろうと思う。その女中はやや年寄りであるという部分が気になる点であるのだが。……明治元年生れであるからこの時セツは24才である。その一方セツは、当時前夫と離婚して居り経済的に難渋の時期でもありハーンが言う『始終家に泊ってくれる』ことが可能である事実は女中セツ同一人物説を支持するようだ。彼女は前出『思い出の記の』の中で言う。私と一緒にになりましたので、ここ(織原家の借屋)では不便が多いというので24年の夏の初め(6月22日)、北堀と申す所の士族屋敷に移りま

して一家を持ちました。私どもと女中と小猫とで引越しました。北堀の屋敷に移りましてからは、湖の好い眺望はありませんでしたが、市街の騒々しいのを離れ、門の前には川が流れて、その向う岸の森の間から、お城の天主閣の頂上が少し見えます。屋敷は前と違い、士族屋敷ですから上品で、玄関から部屋部屋の具合がよくできていました。山を背にして、庭があります。この庭が大層気に入りまして、浴衣で庭下駄で散歩して、喜んでいました。山で鳴く山鳩や、日暮れ方へのそりのそりと出てくる蠶がよいお友達でした。テテポッポ、カカポッポと山鳩が鳴くと松江では申します。その山鳩が鳴くと大喜びで私を呼んで『あの声聞きますか、面白いですね』自分でも、テテポッポ、カカポッポと真似してこれでよいかなどと申しました。と。

ハーンは次の様に述べている。

大橋川のほとりの自分の小さな二階建ての家（織原家の借家）は、鳥かごのようにきやしゃな家ではあるが、暑気が近づくと、部屋の高さが小蒸気船の船室と殆ど同じで、普通の蚊帳がつれぬほど狭い。のだから余り小さ過ぎて暮し心地がよくないことに気がついた。自分は湖水の美しい眺めを失う事は遺憾であったが、市の北部に当る古城の背後の非常に静かな町へ転居するの必要を感じた。

自分の今度の家は、ある高位のサムライの昔の住宅で家中屋敷（katchiū-yashiki）である。城の濠沿いにある道路からは瓦葺きの高い塀で仕切られている。お寺の入口にあるのと殆ど同じ大きさの門口へ低い幅広い石段で上って行く。その門の右手に壁から突き出て太い棧のある大きな木造の籠のような見張窓がある。封建時代にはそこから武装した家来が前を通るすべての人に、——棧は密に作ってあってその後にいる人の顔は見えぬのだから、目に見えぬ見張りを——厳しい見張りを何時もしたものである。門の内側の住宅へ行くまでの所にも、また両側に壁があるから、客は許可を得なければ何時も白い障子がしまっている入口を自分の前に見得るだけである。あらゆるサムライの家同様、住宅そのものはただ一階建であるが、内には部屋が十四あってその部屋部屋は高く広く、また美しい。……縁側のある一角からは二つの庭を同時に眺め楽しむことができる。と。

日本の生け花についてハーンは言う。

日本人の花の活け方を少し——この技術を実地に知得するには、生来の本能的な美感の外に、数年の研究と経験が要るから、——学び得た後で、始めて人は西洋人の生花装飾の思想は、全く野鄙だと考えることができる。この観察は何等軽率な随喜湯仰の結果ではなくて、内地に長く居住して樹立し得た確信である。自分はただ日本の熟練家だけがその活け方を知っているような風に——花瓶の中へ単に小枝を突込むのではなく、恐らくは摘み切ったり、姿を正したり、みやび極まる手細工をしたりに、丸一時間の骨折りをして——活けた、唯一本の花の小枝の言うに言われぬ美しさが判るようになって来たから、だから、西欧人が「花束」と呼ぶものをば、花の野鄙な虐殺であり、色彩観念に対する凌辱であり、蛮行であり、言語道断である。としか今は考えられないのである。

それとやや同じように、またそれに似た理由で、古い日本の庭はどんなものであるか知ってから後は、わが本国の費用を尽した庭を思い出すと、自然を犯す不釣合なものを創造するのに、富なるものが、何を為しとげ得るかの無知な誇示としか考えられないのである。

日本の庭は花の庭ではない。植物を栽培する目的のものでもない、それは山水の庭である。要するに或る日本風景の可愛らしい生きた雛形である。

記憶すべき今一つの一番重要な事実、日本庭の美を理解せんためには、石の美を了解する——或いは少くとも了解することを学ぶ——必要があるということである。人間の手が切り出した石の美ではない。ただ自然が形づくった石の美である。諸君は石に性格があること、石に調子があり、また明暗があることを感ずることが、しかも切に感ずることができなければ、日本の庭の芸術的意味の全部は、諸君に示顕され得ないのである。……………

在るべくも無い山水を、あるいは純理想的な山水を造ろとする努力は、日本の庭では為されない。その芸術的な目的は、本当の山水の人目を引く所を忠実に模倣し、かつ真の山水が与える真の印象を伝えるに在る。だから同時に一つの絵であり、また一つの詩である。恐らくは絵の方よりも詩の方が余計な位であろう。それは自然の風景が、その移り変る相好で、喜悦の念、或いは、森厳の念、物すごい感じ、美しい感じ、力の観念、或いは、平和の観念を与える如くに、山水庭園師の労苦に成る自然の真実な反映は、美の印象を与えるばかりではない、精神に或る気分を起すに相違ないからである。昔の偉大な山水庭園師は、始めてこの技術を日本に輸入し、後にこれを発達させ、ほとんど玄妙とも言うべき一つの学問とした仏教の僧侶たちは、その説を、更に進めて、道徳的教訓を庭園の設計に表現する。——貞節とか、信心とか、敬虔とか、満足、平静、夫婦の至福という抽象観念を、それで表現することは可能だと思っていた。それで、詩人、武士哲学者、僧侶などその持主の性質に応じて、それぞれ庭園を工夫した。

ハーンの住宅についての叙述（長い文であるが引用する）

自分は既に、自分の住所を少し好き過ぎて来た。毎日、学校での自分の勤務から帰って来て、教師の制服を、それよりも無限に気持のよい、日本着物に改めてから、庭を見渡す日陰の緑に、うづくまるという単純な快樂に、授業5時間の疲労を償って余りあるものを見る。その崩れた瓦の屋根の下に、厚く苔むしているあの古風な庭壁は、市街生活のつぶやきすら締め出して入れないように思われる。鳥の声、せみの叫び、或いは、長い間を置いて、水へ飛び込む蛙の物淋しいジャブンといふ音のほかには、音は何一つ聞こえぬ。その壁は町の街路以上のものから自分を隠遁させる。壁の外では、電信と新聞紙と蒸気船の、変化した日本が唸っている。内には、悠々たる自然の平和と、十六世紀の夢とが住んでいる。空気そのものにすら、古色の妙趣があり、身のまわり全てに、眼には見えない優しい、ある物が居るといふ仄かな感じがする。そのある物と言うのは、古い絵本に見る貴婦人のような顔をしていて、この庭全部が新しかつた時、この家に住まっていた、今は世にない、貴婦人たちの静かな出入では或いはなかるうか。石の灰色の妙な姿に触れたり、長く愛好された樹木の枝葉の中を渡ったりする、夏の日光にすら霊の優しさがある。

これらは過去の庭である。未来はこれらの庭をば、ただ夢として、どんな天才もその妙趣を再現することのできぬ、忘れられた芸術の所産として、知るに過ぎぬであろう。

ここではどんな動物も、人間の借家人を恐れぬように思われる。蓮の葉に止まっている小さな蛙は、自分が手で触っても殆んど尻込みしない。とかげはたやすく自分の手が届く所で日にあたる。水蛇は恐れなしに自分の影をすべり過ぎる。せみの楽隊は、つい自分の顔の上の梅の枝でその耳を聳する合奏を始める。そして、かまきりは厚つかましく自分の膝の上で姿を構える。つばめやすずめは、自分のところの屋根に巣を作るばかりではない。——或る一羽のつばめは、実際に浴場の天井に巣を作った程で、心配なしに家の中へ入りさえするし、いたちは自分のすぐ眼の前で何の気がねなしに魚を盗む。野うぐいすが一羽、窓の横の杉の木にとまって、美わしの蛩声を発して、自分の籠の愛鳥（筆者注：ハーンが、ちょっとした病気をした時、彼のさびしさを慰めようと、前述の籠手田知事の令嬢が、うぐいすを贈った。彼はそれを熊本へ転勤するまで飼っていたが、転勤の際、西田教頭にゆずった）を歌の競争に挑む。そして常に金色の空気を通して、小松の緑の薄暗がりから、山鳩のあの物あわれな愛撫するような、美妙的な呼び声が、自分の耳へ流れて来る。テテ ポッコポ テテ ポッコポ カカ ポッコポ カカ ポッコポ

どんな、ヨーロッパの鳩も、こんな鳴き方はせぬ。山鳩の声を始めて聴いて、その心に或る新しい感じを感じ得ない人間は、この幸福な世界に住む価値は、ほとんど無いのである。しかし、これらは、全て——この古い“カチッヤシキ”も、その庭も——必ずや数年を経ずして、永久に消えてしまうであろう。早くもすでに、自分のよりももっと広い、もっと美しい庭が、稲田や竹やぶに変わっている。そしてこの古雅な出雲の町も——計画されて久しい鉄道線路に、やがては触れられて——或いは、この十年のうちにすら——膨張し、変化し、平凡となり、ここの地面を工場に、製造場に要求するであろう。ただここばかりではない。すべての土地から、古昔の平和と妙味とが失せ去る運命の下にあるように思われる。

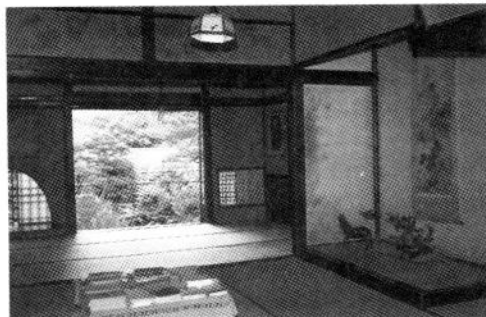
筆者注：上の文の中で、ハーンは彼が愛した庭の運命について、心を砕いているが、ハーンが借りていた当時からのこの家の所有者である根岸家では、この旧居を、ほとんど全く、ハーンの当時のままに現在まで保存するようにとあらゆる努力を払って来られたとのことである。文部省指定史蹟になって居る。

根岸家時代のハーンのこと

前述の通り、ハーンは、セツ夫人を娶ったので織原借家が手狭となった。故に明治23年6月22日に、北堀町根岸邸に移転した。同年11月15日に、ここを去って熊本市に出発するまで五箇月間居住した。セツは『出雲は面白くて、ヘルンの気に入ったのですが、西印度のような暑い所に慣れたあとですから、出雲の寒さには、ずいぶん困りました。その頃の松江には、まだストーブと申すものがありませんでした。学校では冬になりましたも、大きい火鉢が一つ教場に出るだけでした。寒がりやのヘルンは、西田さんに、授業中、寒さに困ることを話しますと、それならば外套を着たままで授業をなさいとのことでした。この時一着の、オーバーコートを持っていました

が、それは船頭の着るものだと言っていました
が、それを着ていたのです。好みはあったので
すが、服装などはその通り無雑作で構いません
でした』と述べている。

前文でセツが『女中と小猫とで引越した』と
言う当の女中を前記桑原翁は探し出された。そ
れは、小泉氏の親戚高木荅太郎氏の娘で高木八
百とゆう人で67才で健在であったのでハーンに
関して種々聴取するところがあった。高木八百
は、ハーンが熊本に向けて出発した当日まで側
近した人であるという。以下は彼女が述べるところである。……………『何分五十年余りも昔のこ
とであるので』記憶の混線訂正係として、嫁女登志夫人を伴って来たのである。『八雲先生がだん
だん高名になられますに従い当時の思い出をこの嫁に話していただきましたので』と彼女は言う。私が
参りましたのは湖水べりにある織原氏の借家で私は十八才でした。根岸邸に移ってから先生の書
斎は、北向きの、前に池がある六畳間。床の間がついた中央の九畳の間は居間兼客間で、お寝室
でもありました。セツさんは終始日本服、丸鬘で、実に立派な奥様ぶりで大へん先生の気に入っ
ていました。朝は牛乳2合と生卵5個が常食で、昼飯は市内殿町の今の日本銀行支店のある所に、
昔、曳野旅館、当時はこれを、しゃれて、曳野ホテルと申していましたが、この旅館から、先生
ご夫妻の食事を毎日運びました。この献立は何という特別の注文はなく、先生は多く煮メ物を愛
され、また卵を使った日本料理がお好きでした。夕食は必ず洋食でありまして、先づコーヒー、パン
などを加えて5品位の料理であり、その一皿は必ずピフテキでした。この洋食は材木町の西洋



ハーンの居間から書斎を通し北の庭を見る



1889年(40才)のハーン
来日の前年である

料理店魚才こと鎌田才次方より取り寄せました。夕食後には必ず、
朝日ビールを二本づつ飲まれました。このビールは、当時松江大
橋北詰の、山口卯兵衛薬店だけにあったかと思います。終始朝日
ビールを、何ダースか買置きまして毎晩差し上げました。先生の
酒のお肴は実に妙なものでして、毎晩ビールの後で、必ず、柔ら
かい菓子(今は松江に見当りませんが、黄金牡丹と申し、卵黄製
で黄色の花弁の中央が紅色になっているもの)を5、6個食べら
れました。日本酒は用いられません。もし家庭で先生が日本酒を
飲んだと記す書物がはれば、それは日本人のお客の時に限ること
なので、それも私の記憶では、まことに少ないことでした。大体
酒食を出したお客は余りありませんでした。先生は割木をたいた
時の煙は非常にお嫌いでした。そのために炊事には一切割木を用
いせんので、すべて木炭を使いました。朝の牛乳を温めるにも。

昼食夕食を他所から取り寄せましたのも、先生が焚火を好まなかったためでもあります。寒中は炭火で室内を暖めました。風呂も炭火によりました。先生の風呂は毎日のことで、極めて微温湯で、かつ入浴時間が極めて早く、いわゆる烏の行水でした。奥様のご指示で先生の眼の平癒祈願のため私か私の母が先生の代参として、一畑薬師へ月一回は必ず参詣しました。先生の時間励行と几帳面なことに關して一つお話ししましょう。何時頃かはっきり致しませんが、ある日、私はお風呂の焚き付けを始めていました時、フト私は毎晩定刻に差し上げます朝日ビールの残りが殆んどなくなっていることを思い出しました。ところが早や時間がないためにこれは大変なことをしたと狼狽し、私は風呂焚きの際とて、はだして、おまけに尻をはしおりながらそのままで駈出して、大橋詰の山口薬店まで約十町(約1090m)許りを往復して、息もたえだえで漸く時間通り先生に朝日ビールを差し上げることができました。これとても別段、先生に叱られるのが恐ろしいという意味は少しもなく、ただ、当時先生の家庭万事が時間励行に仕付けられていた習慣から、我知らず飛び出した次第で、途中行き合う人々が私のこの姿を何と見たであろうかと、後年このことを子供たちに話しまして笑いましたことでした。

前出の東京文科大学のチェンバレンへの書翰の中で、
親愛なるチェンバレン氏よ。

私は私自身の弱点を白状するのは、非常に恥じ入ったことではありますが、しかし事実は申し上げなくてはなりません。実は私は十箇月間というものは、日本食ばかり食べていて、他には如何なる食物も口に入れなかったもので、つい肉食を腹いっぱい食べるよう余儀なくされたのであります。たった二日間だけの肉食生活ではありましたが、その結果病気ににかかってしまいましたので、日本食で養生することができなくなりました。鶏卵でいくら勢をつけてもだめなのです。私は牛肉、鳥肉、ソーセイジ、フライにした固形物などを驚くばかり貪食し、ビールを鯨飲しました。これというも私は一人の外国人の料理人を松江で僥倖にも見出したからであります。私は大いに赤面しています。しかしこれは私の罪でもなければ、日本人の罪でもありません。みな私の祖先の罪なのです。すなわち、北方人類の狂暴にして狼の如き遺伝的本能とまたその傾向とに原因しているのであります。父およびその他の人たちの罪です。……………と書いている。

教育にふれて彼は論じる。松江尋常中学校の教育は、最も優秀なそして進歩した教育であるが、日本ほど教育の費用が安価なところが、どこにあるかを疑う……………米貨20ドル(訳者注：20円)に相応する高があれば、一箇年の下宿料に十分である。授業料を込めて一切の費用は一箇月7ドル程である。(訳者注：当时下宿料は一箇月が1円50銭程で、寄宿舎では1円85銭で



ハーン愛好の北庭の心字池

あった。ここに訳してある7ドル、すなわち7円は過大)と述べる。尋常中学校において、これほど、立派に与えられる知育は、結局、生活費授業料の安いことなどから想像されるようにはさほど安くは得られない。すなわち、自然は更に高い授業料を要求して、嚴重に、人の生命においてその負債をとり立てるからである。

この道理を理解するためには、先づ現今の出雲の学生が、米飯と豆腐を食べながら学ばねばならない近世の学問は、贅沢なる肉食によって強健になった頭脳によって発明され発達させられ総合されたものであることを、知らねばならない。西洋が日本人の前に投げ出した文明を消化することが十分できるためには、一般の粗食という事は、日本の教育者が解かねばならない難問題である。ハーバート・スペンサーが示した通り、人間の元気の多少は、肉体的精神的何れを問わず食物の滋養如何によるものである。そして歴史は、美食の人種は、気力旺盛かつ優秀なることを示している。列国民の将来において恐らく頭脳が勢力を占むるであろう。しかも頭脳も活力の一つであるから、やはり胃を通じて養われねばならない。全世界を動かした思想で、パンと水とでできたものは、曾てなかった。これらの思想は、ビフテキとマトンチョップ、ハムエッグ、豚肉とプデンによって作られ、さらに強いワイン、強いビール、強いコーヒーによって刺戟されたのである。また科学は、生長ざかりの少年青年は、大人よりも、一層の滋養物を要すること、ことにまた学生は頭脳の労働より起る肉体的疲労を回復するために、強い滋養を要することを教える。と。

ハーンの説は現在の栄養学から見ても全くの正論と言うべきであろう。わが国では戦後も、ごく最近になるまでは、美食どころか、三度の食事さえも満足には得られない多数の人々が居たもので、欠食児童という言葉もそんなに古い言葉ではないようである。以前には上流階級でも、ハーンの言う美食どころか、動物性蛋白質と言えるものさえ、ごく少量しか摂取し得ていなかったようであるが、それでも、『肉体的精神的元気』に十分に富んでいたようである。もし本当にそうであれば、日本人の不思議なところである。昔の日本人の猷立を詳しく知りたいものである。

セツが述べている通り、寒さに弱いハーンは、松江の冬には、大変困った。殊に寒さのために視力の弱い眼が更に悪くなるのを恐れた。冬だけどこか暖地で過し、その他の季節を松江に住みたいとも考えたが、熊本第五高等学校へ転任することになった。松江での一年余りは、運命の子ハーンにとって最も幸福な時期であり、終生忘れることはできなかった。東京に永住するようになってからでも、松江の思い出話が出ないことは、一日もなかったということである。

セツ夫人と出会い家庭を作ったこと。松江の人々が彼に示した尊敬と友情の数々。彼の心を引きつけて離さない神社仏閣名所旧跡。気に入った庭等々。明治29年6月、東京へ赴任の途中松江の北堀町の旧居に立ち寄り『わが家に帰ってきた』といかにも嬉しそうに、二時間ばかりも屋敷の中を見て廻り最後に井戸の水を飲んで、心ゆくまで、松江時代を懐かしんだとのことである。(小泉先生旧居の記)ハーンは『日本瞥見記』をこの家の書齋で執筆し北側の心字の池を見てはその疲れを癒やしたのである。『この池は蓮池で、蓮がその最も大なる妙趣となっているのである。葉が始めて解れる時^{はく}から最後の花が落ちるまで、その驚くべき生長の一々の相を見るの

は楽しみである。殊に雨降りの日には、蓮は観察に値する。その盃形の大きな葉が、池の上高く揺れつつ雨を受けて暫くの間、それを保つが、葉の中の水が或る高さに達すると、きっと、莖が曲って、ポチャリと高い音を立てて水を零す。そして、また、真直ぐになる』と。この彼の詳細な観察ぶりを見ても彼がどんなにこの池や庭を深く愛好していたかを想像することができる。

これほど、彼が愛した松江の土地とも、離別の時が遂にやって来た。それは明治24年11月15日（日曜日）である。この当時松江は、コレラの流行で13日（金曜日）は中学、師範、附属小学校は臨時休校の状態であり、しかも出発の日が日曜日であったので、ハーン送別の生徒を集めるのは蓋し容易なことではなかったであろう。学校の生徒はもちろん、松江全市はハーンとの、離別を惜しんだ。中学・師範の教師一同からは、古出雲焼の花瓶一对を、中学生一同251人からは、金銀づくりの短刀を餞別として贈呈し、師範の生徒は、送別会を開いた。前述の諸条件にも拘わらず、中学生全部は、教師、市の有志、県の高官と共に波止場までハーンを見送ったとのことである。ハーンは、大橋から小蒸汽船に乗って宍道まで、それから車で広島に、呉から汽船で門司へ行き汽車で春日まで、そして車で熊本に赴いた。松江の人たちは、ハーンが、月俸100円も取るのさえ驚いていたのに、熊本高等中学校では200円の月俸ということを知って、ハーンを松江に引き止めることは、到底不可能であることを悟って、すすんで榮転を祝う気になったに違いない。ハーンは松江尋常中学校教師として、まだ5箇月も契約期間が残っていたのであるが、契約不履行を非難する声は全く聞かれなかったということである。わが松江市民の態度には全く敬服の他はない。

明治24年10月13日（火）

●ヘルン氏熊本県に赴かんす

本県尋常中学校の英語教師として聘したるヘルン氏は評判ナカナカに宜かりしが、大学の御雇教師チャンバーレン氏が周旋し、熊本県中学校に招聘の事、既に双方の間に約成り、熊本県に於ても大いに氏に望を属し、一日も早く来りて中学子弟を教養せよと催がし来る程なれば、氏も断然当地を辞して彼の地に赴く決心なりと。因みにいふ。熊本県に於ては、月俸二百円の報酬なる由。と山陰新聞は述べている。松江の人々の、榮転を祝う真情に送られての熊本への赴任ではあったが、新任地熊本は、一般の人々の気質とハーンに対する態度、学校での同僚との関係、市街およびその周囲の環境など、ハーンにとって望ましいものでないことを知るには、余り時間が、かからなかったのである。殊に彼が、一番問題にしていた寒さのことも、彼の期待を十分満足させることはなかったようである。後に、東京へ赴任する途中一度松江に立寄ったことを除いては、彼が、あの様に熱愛した松江の土地と人人に、再び見える機会は、遂に来なかったようである。

（山陰新聞の記事については、前号同様、広瀬朝光氏著、小泉八雲論から、ハーンの文その他については、（第一書房）小泉八雲全集から筆者が適宜抜粋したものである。）（未完）